

平成20年度

北嶺中学校入学試験問題

国 語

(注意)

- 1 問題用紙が配られても、「はじめ」の合図があるまでは、中を開かないでください。
- 2 問題は全部で4枚で、解答用紙は1枚です。「はじめ」の合図があったら、まず、ページ数を確認してからはじめてください。もし、ページがぬけていたり、印刷されていないかたりする場合は、静かに手をあげて先生に伝えてください。
- 3 答えはすべて解答用紙の指定された解答らんを書いてください。
- 4 字数が指定されている場合には、特に指示のないかぎり句読点も数えてください。
- 5 質問があったり、用事ができた場合には、だまって手をあげて先生に伝えてください。ただし、問題の考え方や、言葉の意味・読み方などについての質問には答えられませんので注意してください。
- 6 「おわり」の合図で鉛筆をおき、先生が解答用紙を集めおわるまで、静かに待っていてください。

一

昭和三十三年、八歳の「俺（徳永昭広）」は広島から佐賀の「ばあちゃん」の家に預けられた。その後、毎年の運動会に「かあちゃん」は親に来てはくれず、ついに佐賀で八回目となる最後の運動会をむかえた。なお、「田中先生」は、「俺」がキャプテンをとめている野球部の顧問の先生で、何かと「俺」の世話をしてくれる先生である。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

寝たのか寝ていないのか分からないまま、夜が明けてしまった。

① ばあちゃんが仕事に出かけると、俺は土手に立って、かあちゃんがやって来るのを待った。朝、広島を出て、そんなに早い時間に着く列車のあるはずもなかったが、じっと寝ていることなんてできなかったのだ。そのまま登校時間になった。

俺の胸は不安でいっぱいだったが、あきらめてはいなかった。

『運動会、観に行きます』

かあちゃんは、はつきりと手紙にそう書いていたのだ。

「きつと来てくれる」と、俺は信じていた。

運動会が始まった。俺は父兄の中にかあちゃんを探してキョロキョロしていた。

やがて午後になり、プログラムはマラソン大会へと移った。

スタートラインに並んでも、俺はやっぱ見物客の中にかあちゃんを探し続けた。

けれども、かあちゃんの姿はどこにもない。

「1」

遂に、最後のマラソン大会が始まった。

俺は、自分のペースで（ A ）走り始めた。

バイクで先導しているのは、野球部の田中先生だ。

十分、二十分と走り続け、少しずつ呼吸が苦しくなっていく。

同時に、後ろの団体と俺の距離は開いていく。

このマラソン大会は、地域ではかなり有名なもので、父兄でなくても大勢の人が沿道で見守っていた。

「速いねえ、あの子」

「本当」

そんな声が聞こえる。

「2」

俺は二位以下を、ぐつと離しているようだった。

② 俺は、一分、一秒と、とにかく前へ前へ進むことだけを考えていた。

そうしなければ、まだ来ないかあちゃんのことを考えてしまつて、ダメになってしまうそうだった。

俺の鼓動が速まった。

このマラソンコースでは、ばあちゃんの家の前も通ることになっている。

もうじき家の前だ。

③ ドキドキ、ドキドキ、俺の心臓は押しつぶされそうだった。

早く家の前を通りたい。きつと、かあちゃんはいらぬ。

いや、あそこにとどろきたくない。ガツガツしたくない。

そんな気持ちが俺の中で交錯していた。

もうじき家の前という時、俺は見るのが怖くてうつむいた。

俺は、自分の足先だけを見つめて（ B ）走った。

「昭広、頑張つて！」

その時、俺の耳に、かあちゃんの声が聞こえた。

これまで聞いたこともないような、大声だった。

顔を上げると、家の前で一生懸命叫びながら、手を振っているのは、確かにかあちゃんだった。

「昭広ー！ 頑張つてー！」

その横で、ばあちゃんもニコニコと手を振っている。

「3」

家が近づくほどに、どうしていいか分からなかった。

にっこり笑って手を振り返すなんてドラマのような芸当は、到底できそうにない。

「こら、徳永。おかあさんが見とるぞ。下を向くな。（ C ）走れ」

バイクから、田中先生が俺に声をかける。

俺は、顔をあげ、真っ直ぐ正面を向いた。

「4」

「昭広ー、頑張つてー！」

かあちゃんは、懸命に手を振り続けている。

俺は、思い切つて、かあちゃんに向かって叫んだ。

「かあちゃん、速かるうが！ 勉強ばでくんばつてん、足は速かるうがー！」

家の前を通り過ぎてしばらくすると、嘔み殺したような嗚咽が聞こえてきた。

見ると、田中先生が泣いているのだ。

バイクで先導しながら、

「ウツ、ウツ」

と、声を押し殺して男泣きに泣いている。

「徳永、良かったなあ、かあちゃん、来てくれて」

田中先生は、日焼けした汗の浮いた顔を、クシヤクシヤにしている。

俺は、首にかけていたタオルを先生に差し出した。

涙を拭う田中先生を見ていたら、俺の頬にも温かなものが伝った。

「お前が拭け」

田中先生が、泣きながら笑って俺にタオルを返す。

【5】

「先生が、拭いてください」

「いや、お前が拭け」

「先生が、拭いてください」

「いや、お前が拭け」

何度かタオルを押し付け合った後、田中先生は、

「ふたりで泣いてる場合か。もっとスピードあげて、頑張ろう」

そう言っ、俺にタオルを投げつけた。

俺は、() D () 涙をぬぐって、④また一分、一秒と走ることだけに集中しようとしてみた。

前へ、前へ。

誰よりも早く。

かあちゃんが応援してくれているのだから。

一着でゴールインした俺は、二位の選手を二〇〇メートルも離していった。

学校が始まって以来の記録だったと言う。

(島田洋七『佐賀のがばいばあちゃん』より)

【語注】①速かるうが！ 勉強はできんばってん：速いだろう！ 勉強はできないけれど。

②嗚咽：息をつまらせるように泣くこと。むせび泣くこと。

問一 (A) () (D) にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、堂々と イ、黙々と ウ、乱暴に エ、ゆったりと

問二 ①「ばあちゃんが仕事に出かけると、俺は土手に立って」とありますが、なぜ「俺」は早朝から「土手に立って」いたのですか。その理由を答えなさい。

問三 ②の中と ④の中に、「一分、一秒と」と「前へ()前へ」という同じ言葉がありますが、「俺」の気持ちにはちがうものとなつています。②と ④の「俺」の気持ちのちがいを説明しなさい。

問四 ③「ドキドキ、ドキドキ、俺の心臓は押しつぶされそうだった」とありますが、このときの「俺」の気持ちの中には、相反するような二つの思いがまじっています。その思いをそれぞれ漢字二字で答えなさい。

問五 この文章には、次の一文が抜けています。【1】〜【5】のうち、どこに入れるのが最もふさわしいですか。数字で答えなさい。

俺は、またうつむいた。

問六 この文章の表現の特徴について説明したものととして最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、擬音語や擬態語、あるいは名詞止めが多く、詩を読むように味わうことができる。

イ、「俺」の心の動きを、飾り気のないわかりやすい言葉で表している。

ウ、短文の繰り返しにより調子がよく、すじみちの通った論理的な文章である。

エ、方言が非常に多いので、特別な場所、複雑な人間関係がしっかりと読者に伝わる。

オ、同じような会話ばかりで、声の大きさや調子もまったく変わらず単調な感じがする。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校野球の名門校、日大二高に野球入学するまで、私は甲子園ひと筋の野球生活を送っていた。私の野球好きは小学校時代からだったが、中学二年のときには今と同じ一六〇センチまで背が伸びていたのと、飽きっぽい私にとっては珍しく熱心に練習したせいで、中学校時代は杉並区一と自他共に認めるフォークボール投手になり、このぶんでは甲子園から巨人軍入り間違いないとますます熱心に練習して、憧れの日大二高に入ったのだった。

そんな私が高校二年の春でスッパリ野球をやめたのは、日大二高野球部で、小谷クンという男を知ったからだ。

小谷クンとはじめての出会い、忘れもしない日大二高の野球部のセレクションの日である。前年の夏の杉並区大会で六回と三分の二をフォークボールで投げ切り、はじめは審判のおじさんに、「中学生離れしたスゴイ球を投げるなあ」と感心されたものの、そのうちに「いい加減にやめとけ」と言われ、五回の表になる頃には、「肩をこわすぞこの馬鹿」とあきれられ、そのうち何も言われなくなってしまったという輝かしい栄光を味わっていた私は、() A () という気持と、() B () という気持がゴチャゴチャになってピンピンに緊張しながら、日大二高に出かけて行った。校門をくぐり玄関口までたどりつくくと、もうそこには私と同じように陽に灼けた野球少年が何人

も何人も(あ)ムラがついて、お互いに口をきくでもなく手首をブラブラさせたり靴のひもを直したりしている。どうやら彼らは受付を済ましたらしく、ポストンバッグを抱えて入ってきた私をチラチラ盗み見ているようなのだ。私は、早く来たからといって彼らが私より野球がうまいわけではないと自分に言いかけせるや、落ちついたところを見せようと、私たちより頭ひとつ分は背が高く体つきのガツンとした、長靴をはいた上級生らしき人に「受付はどこでしょうか」と声をかけた。ところが、その大男は「C」と言うではないか。彼は上級生ではなく、私たちと同じ試験を受けに来た中学生だったのである。堂々たる体格といい、どっしり構えた態度といい、彼には集まった中学生とはケタ違いの風格が(い)ムラわっていた。その彼が、小谷クンだったのである。

小谷クンが中学生だとわかった私はビックリしたが、集まっていた受験生たちはどうやら私以上に小谷クンがショックだったらしく、結局玄関口にいた連中はみんな試験に落ちてしまった。だから入学後は小谷クンにしても私にしても知った顔はお互いどうしだけということになり、そんなことからしぜん二人は仲良くなったのだった。

中学時代、九州の大会で(う)ユウシヨウウピッチャーだった小谷クンは、日大二高に入ってからめきめきと頭角を(D)。一年生のくせに球の速さでは三年生をしのいでおり、先生やコーチの期待を一身に集めた。「小谷がいるから来年の甲子園が楽しみだ」と言われた。ここ何年か甲子園に出場できなかった日大二高の名譽を(え)カイフクしてくれる選手として、小谷クンは希望の星だったのである。

小谷クンのおかげで私の自慢のフオークボールはまったく影が(E)なくなってしまったが、①私は小谷クンに嫉妬するなどという気はまったくおこらなかつた。それは、小谷クンが野球だけの男、いわゆる野球バカではなかつたからである。野球部というのは上下関係がきびしく、先輩の言いつけにはどんなにくだらないと思っても従わねばならなかつたし、上級生に殴られるのも日常(お)サハンジだったが、小谷クンはそういう風潮に批判的だった。そのくせ文句やグチはせつたいこぼさなかつた。どなたばかりいる部員が多い中で小谷クンの物言いはいつもやわらかかつた。モノを見る眼も的確で、当時高校野球では人気実力No.1と思われていた岡山東の平松より、甲子園に出てもいない山梨の甲府商業の堀内の方がはるかに野球がうまいと言って私を驚かせたりした。正直なところ、私は高校一年の夏には甲子園へ出ることもより小谷クンのそばにいて小谷クンと話をすることの方がずっと大事になつていたのである。

その小谷クンが、二年生になると同時に日大二高をやめてしまった。もちろん野球もやめた。一年の学年末試験で全校四番というすごい成績をとった彼は急に野球より勉強が面白くなり、九州一の名門進学校の編入試験に合格してクニに帰ってしまったのである。小谷クンがやめてすぐ、私も野球部をやめた。希望の星がいなくなつてグチばかりこぼすコーチや、そんなコーチに頭に来てますますひどく下級生にあたる上級生に嫌気が(F)こともあるが、むしろ、あれだけ才能がありながら世の中は野球ばかりではないということを小谷クンに身をもって見せられたという方が、私にとってはショックだったのである。

毎年、夏の甲子園野球を見ると、私は小谷クンが野球をやっていたら、とふと考える。もしかしたら、小谷クンも私と同じように、テレビを見ながらも自分が野球をやっていたら、と考えているのではないだろうか。

小谷クンこの文章を読んでいたらお便り下さい。

(ねじめ正一『いきなり小谷クン』より)

【語注】 *セレクション：選考試験。

問一 ~~~~~ (あ) (お) のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A) (B) にはそれぞれ十字以内の言葉が入ります。考えて答えなさい。

問三 (C) を補うのに最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、 すみません、わかりません……
イ、 つきあたりを右に曲がったところです。
ウ、 案内しますからついて来て下さい。
エ、 ボクも探してるんです。

問四 (D) (F) を補うのにふさわしい言葉を、それぞれ考えて答えなさい。

問五 ①「私は小谷クンに嫉妬するなどという気はまったくおこらなかつた」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、 先生やコーチの注目を一身に集める小谷クンのおかげで、他の一年生は厳しい指導から逃れ、のびのびと活動できたから。
イ、 自分と小谷クンとは、投手としての実力差がはつきりしており、もはや比べようという気持ちすら起こらなかつたから。
ウ、 野球選手としての才能以上に、小谷クンの普段の言動や、もの見方に感心し、人間としての魅力を強く感じていたから。
エ、 上級生に対してもひるまず、堂々としている小谷クンと一緒にいると、先輩からむやみにあたられずにすんだから。
オ、 同じセレクションで合格した唯一の一年生として、小谷クンの速球が三年生をものいであることを、誇らしく思っていたから。

問六 「私」はなぜ、野球部をやめたのですか。文中の言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京芸術大学は、一〇〇年以上にわたって油絵を学ぶ学生の卒業制作に自画像を課していた。その数およそ四八〇〇枚に及ぶという。大学は原則としてそのすべてを保護し、今年(二〇〇七年)の夏に、近年のものまでを含め、その収集を公開した。その機会に私は芸術家の「個性」ということを考えた。

私が見たのは、複製の作品を含めても極めて少数にすぎない。その限りでの印象は、第一、日本の若い画家たちの技術的水準が高かつたという点である。しかし、第二、それぞれの画家の「個性」が際立つものは、はなはだ少ないということである。なぜそうなつたか。

歴史的にみれば、日本には肖像画の長い伝統がなかつた。その理由は、西洋と同じような意味での人間中心主義が日本の伝統的世界観(神道的・仏教的)の特徴ではなかつたからであろう。経済が中世的条件から解放されて文化が世俗化すると同時に、オランダでは(一七世紀) 日常的環境としての風景、市民の面相、画家自身の姿が、神々や神話や貴族たちに代わつて絵画の主要な題材となつた。

それとはちがって、大阪商人が武家支配層に代わって経済生活を支配するようになった時、琳派の画家たちの眼は、大商人の肖像ではなく、紅梅白梅や流水や、かきつばたへ向かったのである。日本の肖像画の大すじは、主として西洋画の影響の下に一八世紀からはじまる他はなかつた。

技術的には、ヴァン・エイク兄弟が一五世紀イタリアで発明された油絵の具を改良し、そのための技法を洗練して、モデルの顔面の細かい表情を描いたらしい。その後が続いたのがホルバイン父子、デューラー、レンブラントである。肖像画と共に、自画像の黄金時代が来た。自画像の「自」は自分、自分自身、自我などの「自」であり、その自我が画家や近代日本の小説家の場合には、同じ一つの文の中で、しばしば二役を演じていた。

第一、自画像に描かれた自分。それは、ほんとうの自分ではない。ほんとうの自分は、自分が描かれたように描かれる（したがってそう見られる）ことを望んだ人物である。と思うや否やそう思っている人物ではなく、そう思っていると思っている人物である。「A」。

このような過程は無限に繰り返されるから「自我追求」はどこまで行っても終わらない……。

だからそこまでは追いつめないというのも一つの選択である。どこまでも徹底的に追いつめる、追いつめざるをえないというのも、もう一つの選択である。どちらを採るかによってその人の「個性」は定まるだろう。どちらを採るにしても、ここでの「個性」の定義は、私の慣習や癖とは全く関係がない。そういうことではなくて、意志の——自由な意志の決定から生じる、多かれ少なかれ持続的な私の態度である。

そこで私は二つの問題に出会う。近代日本一〇〇年間の油絵の歴史には、際立つ個性がほんとうにないのか。これは事実問題である。もし②それが事実だとすれば、その事実にはどういふ背景があり、今われわれはそれをどう評価できるか、——これは評価の問題である。

日本の社会には国の内外の観察者が認めるように、一種の集団指向性がある。その一面を誇張すれば（B）の傾向とも言えるだろう。そういう傾向は、日本に限らずどの国の社会にもありそうなことなので、それを日本の社会の特徴の一つとするには、その程度が殊に日本において著しいと認めなければならぬ。

果たしてそうだろうか。私自身はすでに何度も直感的根拠から日本の集団主義を論じたが、今はその点についての断定的な答えを保留する。しかし確かに日本は（C）性の強い社会の一つではあるだろう。それにもかかわらず、もちろん例外はどここの原則にもあるが、殊に日本社会では目立つといえるかもしれない。

肖像画または彫刻の表情の逼真性において、③日本での作例はヴァン・エイクからレンブラントに至る西ヨーロッパの作品に、量質共にあるかに及ばぬだろう。しかし一三世紀前半、禅の影響が強まると共に、頂相の制作が盛んになった。例えばダルマの鋭い眼の表現は、彫刻にあっても、絵画にあっても迫力のすさまじいものである（雪舟「慧可断臂図」）。またいわゆる似絵の画家たちは、顔面の微妙な表情——したがってモデルの個性の表現などを工夫していた（藤原豪信「花園天皇像」一四世紀）。

一八世紀以来一流の画家たちの西洋画の絵画的リアリズムに対する関心は次第に昂った。京都の円山応挙、江戸の司馬江漢、平賀源内や渡辺崋山や幕末の浮世絵画家たちは、いずれも西洋画の技法を取り入れようと努力していた。

もちろん彼らも例外ではあったということができるだろう。しかし単なる例外ではなく、それぞれのやり方で時代を先取りした実に強力な例外であった。彼らは単に好奇心を刺激されたのではなく、異国趣味に魅せられたのでもなく、司馬江漢が明確に言い切ったように、現実をありのままに描く点ですぐれた西洋の技法の意味を理解していたのである。

（加藤周一『夕陽妄語』より）

【語注】

*₁ 琳派：江戸時代の芸術上の流派。歴史にのこる画家、陶芸家などが数多く出た。

*₂ かきつばた：アヤメ科の多年草。昔から絵画・文学などの題材として取り上げられた。

*₃ 頂相：禅宗の僧侶の姿を写した彫刻や絵画。

*₄ 似絵：鎌倉時代から室町時代にかけて流行した肖像画の一種。

問一 ———— ①「個性」とありますが、筆者は「個性」をどのように定義していますか。三十字以内で抜き出して答えなさい。

問二 「A」に一文を入れるとしたら、どんな文があてはまりますか。直後の「このような過程は無限に繰り返される」を参考にして答えなさい。

問三 ———— ②「それ」とありますが、この言葉の指し示す内容を答えなさい。

問四 (B) (C) に共通して補うのにふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、以心伝心 イ、大器晩成 ウ、付和雷同 エ、本末転倒 オ、竜頭蛇尾

問五 ———— ③「日本での作例はヴァン・エイクからレンブラントに至る西ヨーロッパの作品に、量質共にはるかに及ばぬだろう」とありますが、どういふことですか。この内容の説明として最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、 作品の数の多さもその優秀さも、西ヨーロッパは日本に遅れをとっている。

イ、 作品の数の多さもその優秀さも、日本は西ヨーロッパにひけをとらない。

ウ、 作品の数の多さもその優秀さも、西ヨーロッパは日本に負けていない。

エ、 作品の数の多さもその優秀さも、日本は西ヨーロッパにまさっている。

オ、 作品の数の多さもその優秀さも、日本は西ヨーロッパにかなわない。

問六 本文の内容を説明したものととして、最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、 日本の中世の絵画は神々や神話に題材をとった作品が多数であった。

イ、 西ヨーロッパでは人間中心主義が肖像画や自画像の流行をもたらした。

ウ、 東京芸術大学の学生の自画像はどれも個人的で技術的にも優れていた。

エ、 中世の西ヨーロッパでは、花や山河などの自然を描くことが主流であった。

オ、 日本では一八世紀になるまで、肖像画を描くという習慣はまったくなかった。